



# 岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

中山間地域における都市・農村交流のあり方：  
岐阜県朝日村を事例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-06-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三宅, 康成, 松本, 康夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12099/5813">http://hdl.handle.net/20.500.12099/5813</a>

## 中山間地域における都市・農村交流のあり方 —岐阜県朝日村を事例として—

三宅康成・松本康夫

生産流通管理学講座  
(1995年7月31日受理)

## Development of Rural-Urban Interaction in a Hilly Rural Area —A Case of Asahi Village, Gifu Prefecture—

Yasunari MIYAKE and Yasuo MATSUMOTO

*Department of Production and Distribution Management*  
(Received July 31, 1995)

### SUMMARY

In a remote hilly areas, residents entertain high expectations that rural-urban interaction will rehabilitate their rural community. The purpose of this study is to propose a view of rural-urban interaction which is suitable for Asahi, a village in a typical hilly rural area. We examined natural and social conditions of this village and clarified the factors involved in rural-urban interaction.

Many urban residents visit this village annually. However most of them go to enjoy skiing or skating. Such so-called "hard tourism" does little to promote interaction between village and urban residents. It is necessary to create new interaction style. As a result of our study, we proposed concrete interaction modes in Asahi village from the view points of nature-oriented and continuous interaction as well as functional improvements of the present facilities for tourism.

Res. Bull. Fac. Agr. Gifu. Univ. (60) : 105—112, 1995

### 要 約

中山間地域では、衰退した農村社会の復興のために、都市・農村交流の役割に大きな期待が集まっている。本論では、中山間地域に立地する朝日村を対象にして、本地域に合った都市・農村交流のあり方を検討することを目的とした。立地条件、自然条件、社会条件を詳細に明らかにし、都市・農村交流に関わる課題を抽出した。

朝日村では、スキー・スケートによるレクリエーションが成立しているが、いわゆる“ハードツーリズム”に依存した従来の形態であり、地域住民との交流も密接でないため、新たな展開が必要となっている。検討の結果、①自然を活用した都市・農村交流、②継続性のある都市・農村交流 ③従来の観光施設の機能強化の3点を視点にして、都市・農村交流のあり方を具体的に提言した。

### I. は じ め に

わが国の中山間地域では、過疎化・高齢化の進行が著しく、農業の衰退はもとより農村社会の崩壊等、深刻な問題を抱える市町村が少なくない。これに対し、活力のある地域を取り戻すために、地域振興・地域活性化への取り組みが精力的になされている。幸いにして、昨今の国民の価値観の変化により、都市においては自然回帰志向が強くなり、農山村地域に対する評価も高揚してきている。都市・農村の交流はこうした社会背景をもとに、他地域（都市）に開かれた自治体への変革によって、地域の振興を図るための

表 1 観光・レクリエーション資源と特徴

観光資源	特 徴
美女高原	美女ヶ池や沼地がありミズバショウの群生地 オートキャンプ場が整備
鈴蘭高原	白樺・から松林の間にスズラン・レンゲ・ツツジが群生 鈴蘭高原スキー場、ゴルフ場、スキー場、テニスコートが整備
御岳自然休養林	胡桃島キャンプ場
カクレハ高原	キャンプ場
秋神川（秋神ダム）	アマゴ・イワナ釣り
秋神温泉	ラジウム塩類泉

効果的な手段となるであろう。

本論では、中山間地域の事例として朝日村を取り上げ、自然・社会条件や観光の現状を明らかにした上で、中山間地域における都市・農村交流の方向性を検討した。

## II. 地域の特性

### (1)自然条件

朝日村は、岐阜県北部、飛騨地域の南東部に位置する。地形は概して高峻であり、標高差はおおよそ700mから2,900mときわめて激しい。典型的な山村であり、村域の約95%が林野となっている。河川は、飛騨川、秋神川、青屋川などがある。集落はこれら谷をぬってはしる河川の沿岸を中心に展開しているため、細長い形状をしている。

### (2)交通条件

朝日村へのアクセスについてみる。鉄道ではJR高山線が村の東に隣接する高山市、久々野町を南北に走っているが、高山、久々野両駅からは村内までバスで20～30分の距離にあり、交通至便とはいえない。道路については、名古屋から富山に至る国道41号線が主要道路である。また、村内には、国道361号線が東西に通過し、村民の生活や産業活動の重要道路となっている。

### (3)観光施設の立地

村内にある主要な観光・レクリエーション資源は表1に掲げるものがある。

それぞれの観光・レクリエーションの立地は図1に示したようになっている。

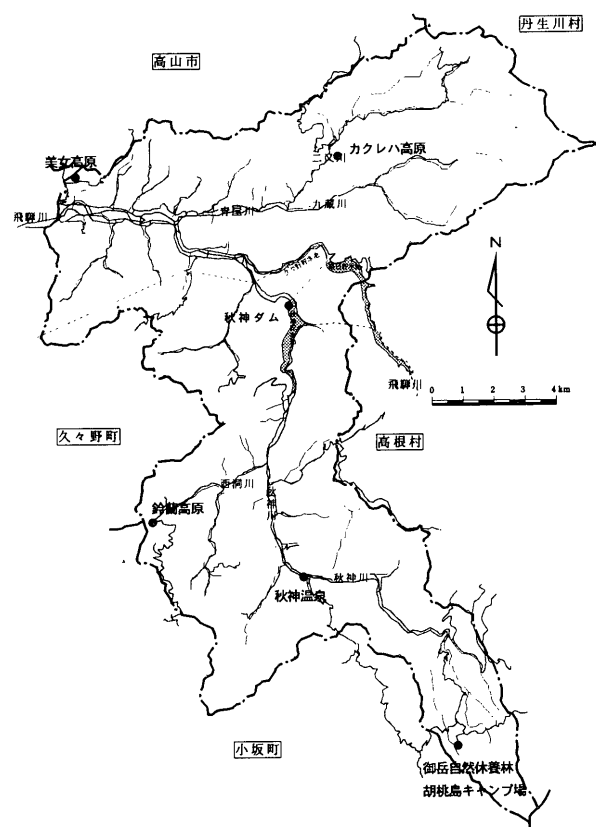


図1 観光・レクリエーションの立地

## III. 観光の現状と都市・農村交流にかかわる課題

本節では、1986年から1993年までの統計<sup>1)</sup>を用いて、朝日村の観光の現状を詳しく分析し、問題点を明らかにするとともに、都市・農村交流に関わる課題について検討する。

### (1)観光の現状

#### 1) 入込数の推移

観光客の入込数は図2に示すとおりである。全体的には利用客数は年間60万人程度で安定しており、若干の微増の状況にある。日帰り・宿泊別にみるとその変化は大きい。すなわち、1987年には約30万であったのが、1988年以降日帰り客数は大きく増加し、近年は年間50万人の水準にある。一方、宿泊については1986、1987年には年間約20万人であったが、1988年以降急激に減少し、その後低い水準で推移している。

日帰り客の増加が総入込数に直接反映されないのは、宿泊客の減少によるところが大きい。

図3は1993年の月別観光客数の変化を示したものである。観光客数の季節変化は顕著で、冬季(12月～3月)および8月の入込客が集中していることがわかる。これらは、鈴蘭高原、カクレハ高原をはじめとしたスキー・キャンプ利用によるものである。冬季・夏季に比べ、比較的気候がよいと思われる4月や10月などの観光シーズンの利用が少ない。

2) 居住地 (図4)

観光客を居住地別にみると、東海地方(岐阜県内を除く)の割合が圧倒的に高く56.5%、県内を含めると90%である。東海以外の地方では、近畿地方が6%を占める他、北陸、甲信越、関東はいずれも3%以下の割合である。朝日村から東海地方までは直線距離にして100～120kmまでの距離にある。

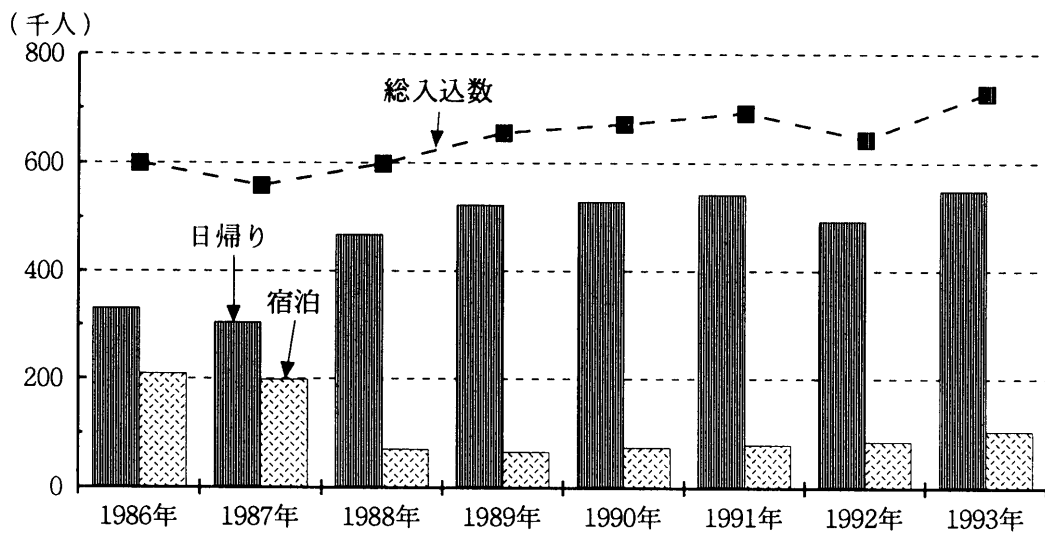


図2 観光客の入込数の推移

資料：岐阜県観光レクリエーション動態調査結果書

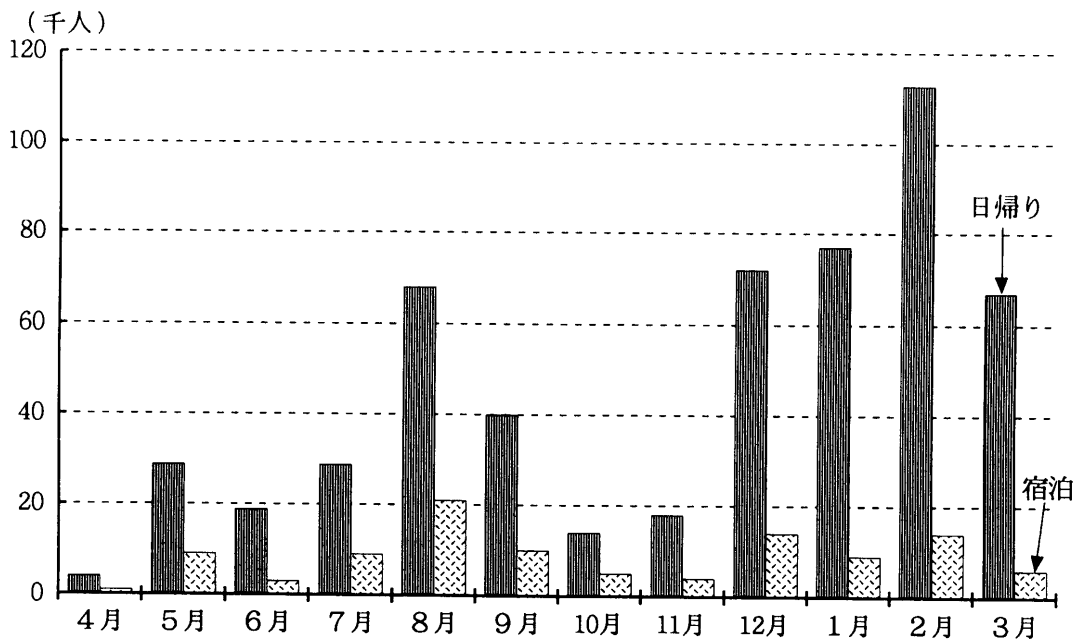


図3 月別観光客数 (1993年)

資料：岐阜県観光レクリエーション動態調査結果書

3) 交通手段

交通手段については、前述のように公共交通機関が発達していないため、自家用車が82.1%、貸切バス16.8%となっており、道路を利用したのアクセスがほとんどである。

4) 観光客の年齢と利用形態 (図5)

年齢は20歳代および30歳代が中心でそれぞれ49.9%、38.3%を占めている。スキーやテニスなどの若者を対象としたレクリエーションが主体である特徴をよく反映している。

利用の形態は、家族など (54.4%) で、4~5人 (51.5%) のファミリーユースが主流を占めていることがわかる。

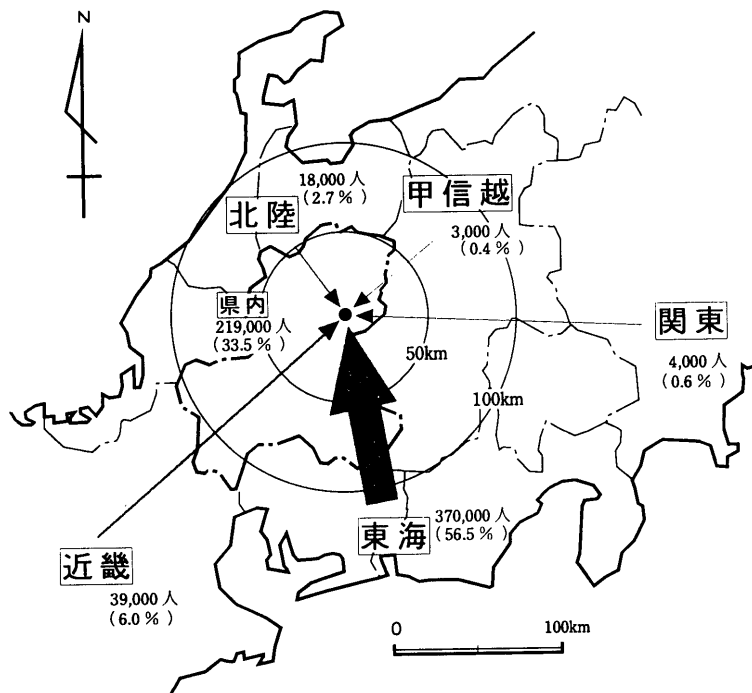


図4 観光客の動き (1993年)

資料：岐阜県観光レクリエーション動態調査結果書

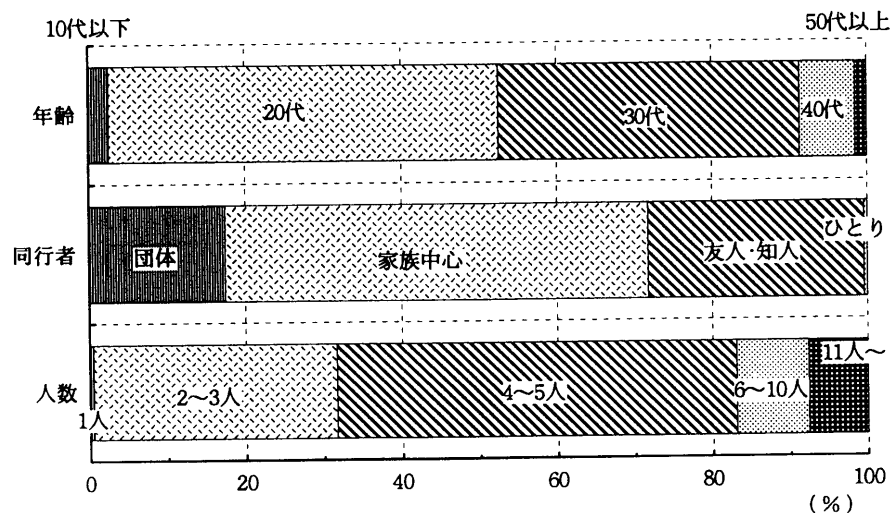


図5 年齢と利用形態 (1993年)

資料：岐阜県観光レクリエーション動態調査結果書

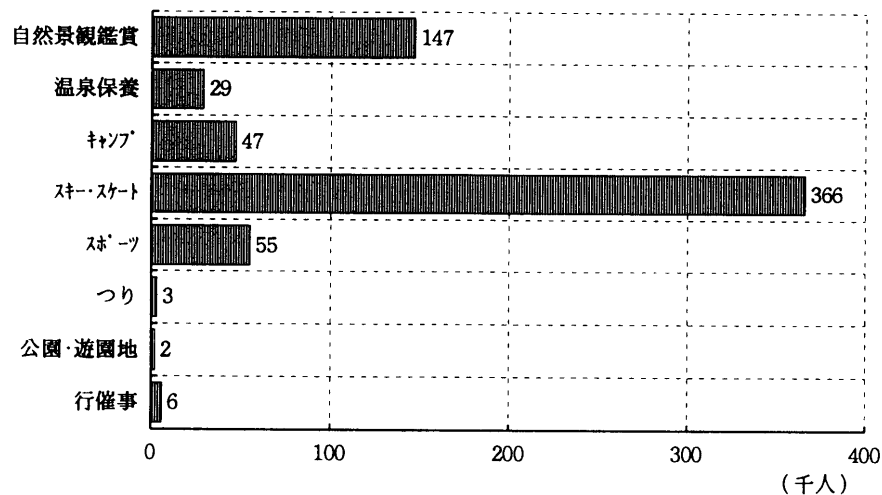


図6 利用目的 (1993年)

資料：岐阜県観光レクリエーション動態調査結果書

### 5) 利用目的 (図6)

利用目的はスキー・スケートがもっとも多く、半数以上の55.9%を占めている。次いで自然景観鑑賞、スポーツ、キャンプの順になっている。

### (2)現状の問題点

(1)でみたように、朝日村の主要観光は、要約すれば日帰り型・施設利用型として受けとめることができよう。いわゆるハード・ツーリズムに依存した形になっている。もちろん、スキーやテニスなどのスポーツやオートキャンプは都市住民にとって最も魅力あるレクリエーションであり、それなくしては当地域の観光は成り立たないともいえる。しかし、残念なことに、本地域の魅力的な特徴である「自然」や「農業」との直接的な関わりを持つ観光・レクリエーションが少ないのは問題点として指摘できる。さらには、村にすむ人々と観光客との接点(交流拠点)も希薄であると思われる。

昭和62年に総理府が行った調査<sup>2)</sup>では、農村の良さとして、「自然と親しめる」、「農村の風土・風物に接することができる」、「農村の自然や生活を子どもに教えることができる」等をあげている。つまり、農村の持つ「自然」や「農業」がキーワードになっている。単なる自然との接触ではなく、自然のしくみや農業のシステムを生活を通して実感し、理解できるような場がぜひとも必要であるといえるだろう。特に、村域の90%以上を占める林野や貴重な動植物資源などを活用したレクリエーションによる都市・農村交流が、今後の進むべき方向であると考えられる。

### (3)地域の考え方

朝日村の第三次総合計画<sup>3)</sup>の基本構想のなかで、観光・レクリエーションの整備・振興に関して次のような記述がある。「観光・レクリエーションの振興にあわせて宿泊施設の整備・充実を促進し、滞在型・回遊型の観光・レクリエーションの形成を図ります。さらに農林業の特産物も積極的に取り入れた観光レクリエーションの開発を進め、村の観光イメージの向上を図り、地場産業の振興を推進します。」

また、住民が自らの集落の将来について記した「住民21世紀の夢」(朝日村資料)においても、レクリエーションに関して、農家民宿、グリーンツーリズム等の事業の推進や滞在型リゾートの可能性などの都市・農村交流の具体案が提示されている。以上より、今後の朝日村におけるレクリエーションの方向性として、自治体、地域住民の両者とも滞在型レクリエーションを発展させたいという意向がうかがわれる。

## IV. 市民農園を核とした都市・農村交流の一試案

朝日村が持つ「自然」を生かし、かつ「農業」を体験させる都市・農村交流の一つの形態として、「住民21世紀の夢」でも取り上げられている市民農園を中心とした整備が考えられるだろう。

市民農園は多種多様な機能を持っている。各機能を提供者、利用者、所在地住民の3つの立場から整理すると以下のようである<sup>4)</sup>。

#### ①提供者側からみた機能

土地保全機能・・・遊休農地の有効利用

雇用機能・・・市民農園の管理等に従事することにより農家の雇用機会を創出する

交流機能・・・農家と利用者が交流し、農業の活性化に資する

#### ②利用者側からみた機能

保健休養機能・・・土に触れる喜び、太陽のもとでの労働

生産機能・・・自分で作物を作り、消費する、無農薬野菜の栽培

教育機能・・・労働の意義の確認と植物の成長の観察

交流機能・・・利用者同士の交流

#### ③所在地住民からみた機能

空地機能・・・日照・通風・延焼防止・避難

風致機能・・・一定の広がりを持つ緑の空間

機能は市民農園の立地条件によって異なる。朝日村の場合は①と②の機能が卓越するであろう。特に、自治体側としては、村内の耕作放棄地・遊休農地の有効利用や雇用の確保などが目下の重要課題でもあるため、これに果たす役割は大きいように思われる。また、高齢者を積極的に活用できるという観点も魅力ではなかろうか。

以下では、朝日村で考えられる市民農園の形態について検討してみる。

#### (1)滞在型市民農園

各区画に滞在できる棟を設置したファミリー対象の市民農園である。特に、市民農園の場合は、農作物の管理を伴うため、利用者の定期的な訪問が必要である。大都市から100～150km程度に位置する朝日村の立地条件等を勘案すれば、滞在型が適当である。当村のレクリエーションの現状においては、滞在型レクリエーションはウィークポイントの一つでもある。朝日村のような農山村地域の市民農園は、大都市内の自然に乏しい空間ではなく、林野を中心とした大自然に抱かれながら農業体験を行うことで、心身ともにリフレッシュすることに醍醐味がある。

滞在型の市民農園は、全国的にみても事例はまだ少ないが、ここで早くから取り組みがなされている群馬県倉淵村クライנגアルテンの例を紹介したい<sup>5)</sup>。

##### <倉淵村の概要>

倉淵村は村域の87%は山林が占めている。農用地面積は729haで、農業の中心作物は野菜、米、園芸作物で、近年菌茸類での複合経営が増加している。農業への就業者人口は減少傾向にあり、高齢化も進行している。田畑とも基盤整備率は低く、農家1戸当たりの農業所得も県平均を下回る地域である。

##### <倉淵村クライングアルテンの目標>

倉淵型クライングアルテンは、地域資源を有効に活用して都市との交流による活性化を目標としてうちだされた整備構想の基本的戦略として位置づけられた。

成立要件として次の5点を挙げている。

①豊かな自然条件で整備可能

②都市から2時間の距離

③自然と歴史・文化の保持

④都市・農村交流の実績

⑤近傍に50万都市が存在

また、基本目標として次の7点を挙げている。

①農地の荒廃化防止

②農業体験を柱とした都市住民の人間性とコミュニティの回復

③都市住民の活力を導入した農地の有効利用による農村活性化促進

- ④都市，農村交流の促進と両者の憩いの場の創出
- ⑤クラインガルテンの制度を利用した新しい生産と消費の結びつき
- ⑥クラインガルテン管理者としての高齢者の生きがいと社会的自立
- ⑦美しい人間的な景観の創出

#### <クラインガルテンの概要>

クラインガルテンは、村の中央部の遊休農地を利用して計画され、事業費は、農村地域農業構造改善事業、群馬県単ふるさと農園整備事業などを導入している。農園は、キャンプゾーン、体験農園ゾーン、コテージゾーン、コミュニティゾーンからなる。それぞれの整備内容は以下のものである。

- a. キャンプゾーン
  - ・ログハウス5棟（バス・トイレ付き4人宿泊用）
  - ・野外炊事施設
  - ・庭園
  - ・農園（1区画平均40㎡，25区画）
- b. 体験農園ゾーン
  - ・農園（1区画45㎡，35区画）
- c. コテージゾーン
  - ・農園（1区画300㎡をさらに5区画に区画）
  - ・コテージ（1区画に1棟で共同利用）

滞在型市民農園は、そのみにおいては利用者が少数に固定される。その意味では住民と密接な交流が図れる可能性を秘めているともいえるが、収入面や地元住民の雇用の観点から見ると課題も多い。群馬県倉淵村の例にもあるように、多様な農園を組み合わせた総合的な整備を行うなど、利用者側にも開設側にも大きなメリットが享受できる体制が必要になるだろう。そこで、滞在型の市民農園の他に、違ったタイプの農園の展開について次にふれてみたい。

#### (2)総合的な自然環境教育の場としての体験農園

(1)では、ファミリータイプの滞在型市民農園について言及したが、ここでは、学童やクラブなどの団体を対象にし、教育機能を重視したタイプの農園について検討してみよう。

本タイプの農園は、団体を対象にしているため、常時利用者が管理する農園ではなく、開設側の支援が不可欠な農園として位置づけられる。ただ、あくまでも農業体験に主旨があり、単にもぎ取り農園的な形態に終始しては全く意味をなさない。従来の観光農園とは異なり、定期的な来訪を前提とすることが望ましい。また、ファミリー型の市民農園では不可能な多数の利用者が参加できるところに特徴がある。メリットとしては、農園や付属施設の管理業務が伴うため、一定の雇用が見込まれることである。農地や施設の管理に高齢者を積極的に活用することも有効であろう。ただ、逆に、利用者との交流は、ファミリー型と比較して一過性のものになりやすい。

この農園は農業体験を核として、自然観察や野外実習などの自然環境教育を計画的に実施するといった総合的なレクリエーションとして発展させていくことが望ましいであろう。利用者の体験内容を詳細にプログラム化し、団体の特徴に応じたメニューにより、一連の流れの中で、農業体験や自然の仕組み学習する機会を創出することで内容に膨らみを持たせることができる。種々の活動の拠点として、ビジターセンター、環境教育センター、宿泊施設などの主要施設や、ネイチャートレイルなどがあげられる。

以上のような形態の都市・農村交流の場合、位置的には、山林、河川、そして人間活動としての農業がおこなえる場所が望ましいと考える。カクレハ高原から青屋川周辺は、立地的にも交流のための条件が整った地域であり、都市・農村交流の展開が期待できる。

#### (3)既存の観光資源の強化

既存の観光施設も都市・農村交流の基幹的な施設として重要である。第3次総合計画でも、回遊型のレクリエーションの形成の必要性が述べられている。従来からの施設は点としての存在であった。これらを



線で結び、利用者が面的なレクリエーションを行えるような方策が期待される。たとえば、施設間を自然を生かしたハイキングコースで結んだり、散策モデルコースの設定などが考えられる。コースの途中には、バードウォッチングや植物観察などが楽しめたり、地域の自然景観を堪能したり、地域文化を学習できる場を設定するなどの工夫もできる。利用者の興味に応じて、遊ぶメニューを選べるような多様性ももたせたい。また、村内で従来あまり活用されてこなかった遺跡・文化財の新規掘り起こしなども必要ではないだろうか。そして各拠点において、住民との交流が密接に図れる仕組みを考えることだろう。

## V. ま と め

都市・農村交流のあり方として、市民農園を核とした展開について提言してきたが、ここでこれらの交流の実施に際して、留意点として次の3点が重要である。

第1に住民と積極的な交流を図る機会の創出が必要である。新たな交流の空間を設定しても、住民からかけ離れた別世界で展開が進んでいくのなら全く意味がない。従来の都市型施設とは一線を引いた考え方が求められる。人と人とのふれあいにより、新しい息吹を農村地域に吹き込むことが重要である。そのためには受け入れ側の条件を整えておかなければならない。

第2にソフト面の充実である。ややもするとハードが先行しがちな施策になりがちであるが、むしろ、ソフト面で工夫し、利用者にとって魅力のある交流の方策が重要であろう。前述の市民農園を例にしても、ただ、区画で農作物を栽培するだけに終わらず、付加価値として自然が豊富な当地域でしか体験できないようなメニューを用意することが是非とも必要であると思われる。その際、自然保全の基本的スタンスに基づいて、豊かな自然の過剰利用による環境破壊は絶対に避けなければならない。

第3に行政、住民、関係組織が一体となって計画の推進がなされなければならない。ある地元住民が「農業は農業、林業は林業という個別的な考えでは明るい町づくりはできない。」と指摘するように、各組織の連携・協力体制が重要である。既存の組織をうまく利用して計画を推進していけば、非常に充実した都市・農村交流が図れるものと考えている。

謝辞：調査にあたっては、朝日村役場の関係者各位に絶大なるご協力を賜った。心から感謝申しあげる次第である。

## 文 献

- 1) 岐阜県企画部観光課：“岐阜県観光レクリエーション動態調査結果書”
- 2) 国土庁地方振興局：“新農村デザイン” 東京、創造書房、7-13, 1989.
- 3) 岐阜県大野郡朝日村：“朝日村第三次総合計画”，84, 1993.
- 4) 農村開発企画委員会：“市民農園整備構想策定調査報告書”，9-11, 1991.
- 5) 利谷信義・和田照男編著：“日本型クラインガルテン実現へのビジョン” 東京、ぎょうせい、184-189, 1994.